

男女6人が乱交 公園で遊ぶ6人の元に突如現れた黒い  
穴そして出てきた老人 老人の一言に・・・・・・

夏真っ盛り。男女複数人グループの住む町ではお祭りやその他フェスティバルなど活気づいている。花火を持って公園に集まるグループ。男3人女3人だ。時刻は夜の11時過ぎ。静かな小さい公園の隅っこの方に2つの鉄棒と子供用滑り台、小さなブランコが一つ。薄暗い夜の中、公園の明るい電灯に照らされ、ところどころ錆びかかっている様まではっきりと見える。

ベンチに3人が座っている。街中の車の通りはほぼない。片田舎だからなおさらだ。

「ああ、楽しかったな・・・・・・」

「ユウトったら、はしゃぎすぎなんだからもうっ！！」

線香花火が尽きた。そろそろ0時になる。さすがにもうそろそろ解散しようか、と話していると・・・・・・。

宙に突然、黒くゆがんだ穴が現れた。そして手がニユルっと伸びてきたではないか。しわくちゃで青白い血管が公園の明かりで分かる。出てきたのは老人だった。グネグネに歪に曲がった杖を持っており、腰は少し曲がっている。少し足元を確認した後、メンバーの方を向く。目をぱちくりさせて驚くメンバー。

夢でも見ているのか・・・？

グループメンバーは思わず夜空を見上げた・・・。

メンバーは学校での友達やメンバーが入っているボランティアなどを通じての知り合い。ボランティアでは社会的に困窮している人の支援やゴミ拾いなどを行っている。先日ボランティアで親睦会があり、それがきっかけで女の子が一人メンバーに追加された。女の子の趣味はインターネット。ブログで多くのファンを持っており最新のネット関連知識も豊富。新しいアプリをメンバーに広めたのも彼女だ。まだ全国的に広まりきっていないアプリだが、今後メジャーになると思われるほどに使い勝手がいい。この日もメンバーたちはアプリを使ってここに集合して遊んでいるのだ。

話を現在起こっていることに戻そう。老人がメンバーに言った。とぼと

ぽぽつぽつ・・・と感情の入っていない声で。

「パンツぬぎぬぎごっこをしてみなされ」

そして続けた。

「さすればよいことが起こるじゃろう」

メンバーの一人のサナエが即座に言った。

「変なおじいさんね、この人！！そう言えばさ、先日のボランティアの集まりでも似たようなこと言ってる変わった人、いたよ？」

ケンタがそれに続く。

「世の中ってこういう変なこともあるからさ、ほっとこ！？」

女子たちはスカートを少しまくり上げ、近くにあった古ぼけたブランコに乗った。公園の明かりに照らされ、女子たちの太ももが光る。

「それはそうとさあ・・・」

あっけらかんと言い放ち、アプリの話に戻るグループメンバーたち。

「そろそろ帰ろっか。その前にさ、どうやったらこのアプリ広まるかな？」

「だよね。ホントにいいアプリなのにさ」

立ちすくむ老人を無視して会話するグループメンバーたち。突如表れた

黒い時空の穴のこともさほど気にしていない様子だ。

キャピキャピと太ももをひっつけてブランコに乗ってはしゃいでいる。

しかししつこく老人は言う。

「パンツぬぎぬぎごっこを、してみることにじゃ」

「やだよおっ！！」

首を振るメンバーたちに老人は続ける。

「何か変わるはずじゃぞ……」

グループメンバーは、仕方なく、いやいやという感じで老人の指示に従った。

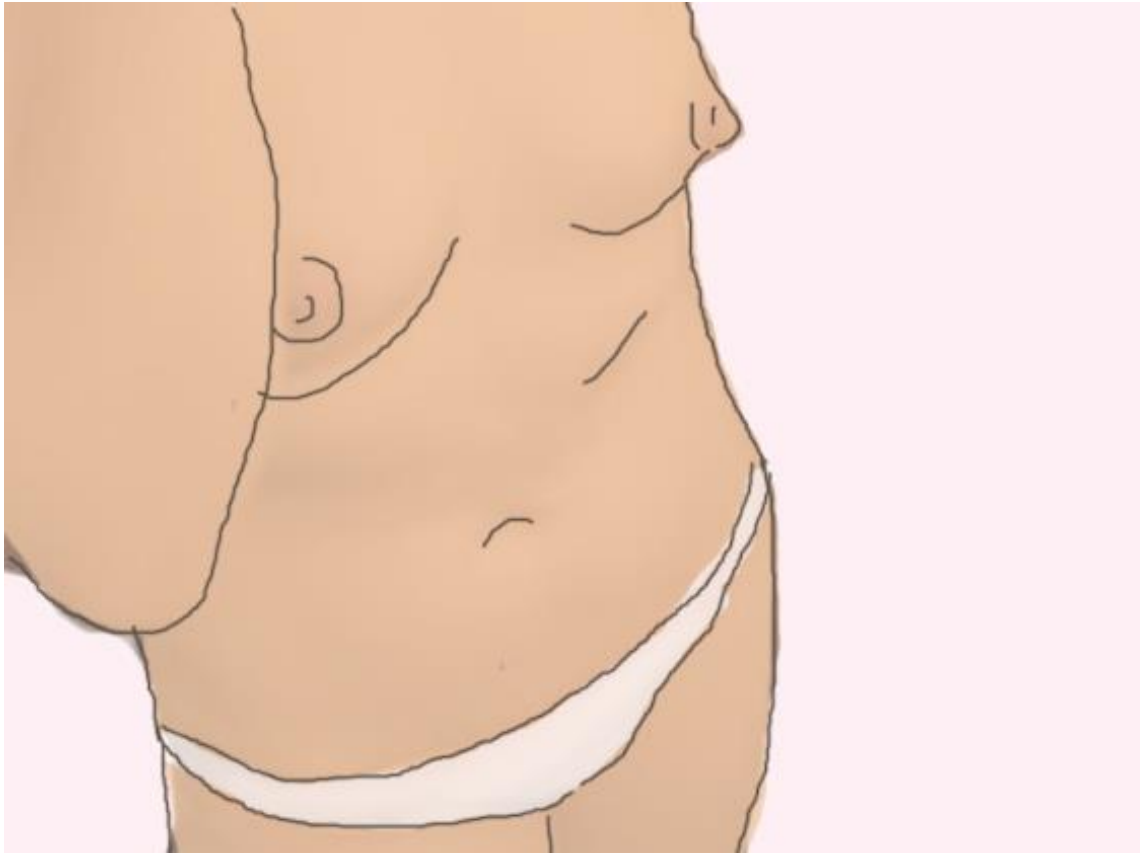
「ちょっとだけだよお……もうっホントは嫌なんだからね」

そういうと女子たちはスカートを脱ぎ始めた。

星が無数に散りばめられた爽やかな夜空の下。

女子たちの真っ白の下着が見えた。

夜は刻一刻と更けていった……。



————— 体験版は以上になります。 —————